

逆カルチャーショックにおける弓引きモデルの検討

田中 共子*・渡邊 真弓**

要旨

逆カルチャーショックの存在は知られるが、その機序の解明は十分とは言い難い。滞在先によく馴染むほど再適応は困難になるとみる「弓引きモデル」が成り立つかどうかをRQ1、文化受容と帰国後のその変化をRQ2、逆カルチャーショックの心理的機序をRQ3として、日本人元留学生12名に半構造化面接を行った。渡航先は北米6名、欧州3名、オセアニア1名、アジア2名であった。語りから社会文化的な認知や行動の変容と維持を抽出し、KJ法を用いて分析した。帰国後切り替えられた文化行動には、表出性（双方向的授業、主張性、明言、相互性）、社会的圧力（自由さ、過度な気遣いなし、おおらかさ）、親近性（身体接触を伴う挨拶、フレンドリーさ、パーティー）の категорияが見いだされた。二文化性への態度として、習慣取り入れ、受容の態度、母文化拒否感、転換への消極性、スイッチングの categoria が認められた。弓引きモデルの該当例は8名見られた。滞在先で文化受容が進み、帰国後は二文化を客観視する2名は再適応の困難が小さく、俯瞰モデルと名付けられた。文化受容が限定的で母文化が比較的維持され、再適応の速やかな2名は維持モデルと名付けられた。滞在先での文化受容は逆カルチャーショックを潜在的に準備するが、母文化観が相対的でなく拒否的な場合に、再適応の難度が高まる。この機序は、文化受容の可逆性や準拠文化の択一性、文化的スイッチングの機能に関わる問いに繋がる。

キーワード：逆カルチャーショック、弓引きモデル、社会文化的適応、日本人留学生、リエントリー

1. はじめに

逆カルチャーショック（リエントリーショック）は、異文化滞中に続く帰国後の心理的混乱として理解され、Wカーブ仮説の二つ目の谷間として図式化されてきた（Gullahorn & Gullahorn, 1963）。日本人留学生の場合も帰国後に、寂しさや物足りなさを感じるなど困難を経験した後に次第に緩和するとの報告がある（高浜・田中、2011）。逆カルチャーショックの可能性と症状は、経験的には認識されている。だがカルチャーショックに比べて研究は遅れており、経営学的な関心による駐在員研究は多いものの、他は散発的な報告に留まり、その発生機序の解明が進んでいるとは

* 岡山大学大学院社会文化科学学域教授

** 岡山県立岡山操山高校教員・平松真弓

言い難い状況にある (Szkudlarek, 2010)。

Akashi & Tanaka (2005) は、滞在先文化によく馴染んだ人が帰国後かえって苦勞する例をみて、文化的順応の結果の心理的反動を「弓引きモデル」と仮称した。逆カルチャーショックの発生機序には示唆的だが実証は十分でない。この発想は、Cox (2004) などが文化的アイデンティティの変容を想定する立場から、母文化への文化特異的な抵抗感の発生を説明していることから理論的には支持されよう。だが逆に渡航先の異文化に速やかに慣れる柔軟性があれば、帰国後も上手に調整できるという可能性も考えられる。この予想は、海外駐在時によく適応できた人は、帰国時に適応スキルを再利用できるとみるBrabant, Palmer & Gramling (1990) の見解から、支持されるだろう。異文化適応研究では、適応を有利に運ぶ柔軟性やストレス耐性などの個人要因の指摘が古くからある (近藤、1993)。性格や性質、特定の能力で適応や再適応を説明しようとする立場 (O'Sullivan, 2007) は、適応能力の一般性を示唆する。だが滞在中と帰国後の適応を別集団で測定した例 (Presbitero, 2016) はあっても繋げて調べた研究がなく、そこを繋ぐ機序は未詳である。

本稿では、弓引きモデルとその対時的モデルを対比的に検討し、逆カルチャーショックの心理的機序を探ろうと考えた。本研究の特徴は、留学中と帰国後を連続させて検討することにある。滞在先文化をどのように取り入れたかを調べ、社会文化的適応における認知行動的な文化受容を具体的に把握して、それが帰国後どのように維持や変容を遂げたかをみる。そしてどのような場合に逆カルチャーショックが生じているのか、その要件と過程を検討する。本研究の目的は、以下3点のリサーチクエスションについて探ることである。RQ1：弓引きモデルは成り立つのか。RQ2：文化受容と帰国後のその維持・変容は、どのようにみられるか。RQ3：逆カルチャーショックの心理的機序は、どう説明されるか。

2. 方法

2. 1. 手続き

インフォーマントは、交換留学から帰国した20代前半の日本人学生12名 (表1)。縁故法で研究協力を依頼し、研究の趣旨と倫理的配慮を説明して承諾を得た人に、1～2時間程度の半構造化面接を行い、お礼にお菓子を渡した。許可を得て語りを録音し逐語録を作成した。渡航先と帰国後の社会文化的適応を中心に、異文化圏への環境移行に伴う経験を聞き取った。面接のガイドラインは以下の通りだが、①②③は高浜・田中 (2011) を参考に、④は独自に設定した；①留学前 留学の動機と留学前の心境。②留学中・帰国後 学校生活・日常生活、人間関係、文化差、精神的健康、慣れたと思う時期。③総括 留学を振り返って思うこと、自分の変化、得たこと。④文化受容 留学中に滞在先文化を取り入れた度合いと帰国後にそれが残っている度合い (1全くなし～10完全の10点満点)。

例えば、留学先に慣れたと思ったのはいつ頃でしたかなど、対話しながら尋ねていき、語りの自然な展開に合わせて話題の順を柔軟に捉えつつ、想定した項目をカバーしていった。

2. 2. 分析

概念抽出に有用とされるKJ法（川喜田、1967）を用いて、まず分析に使うカテゴリを見いだした。語りから、留学中と帰国後における社会文化的な認知や行動の受容と変容を抜き出してカード化し、内容の類似性をみて次第に大きくまとめ、内容を表す表札をつけた。この作業で文化受容関連のカテゴリがつかめる。続いて各例で渡航先と

帰国後の困難を対比し、逆カルチャーショックの発生状況を見て弓引きモデルの当てはまりを判断した。最後に該当例と非該当例において、文化受容関連カテゴリの経験がどのようにみられるかを検討した。分析には、心理学を専攻する大学院生3名と教員1名による協議を加えた。

3. 結果と考察

3. 1. インフォーマントの語りの概要

渡航後、帰国後における語りの概要と読み取った特徴を、表1の順に示す。固有名詞や詳細は伏せ、プライバシーを保護して記載した。異文化滞在による文化の受容と維持に注目する観点から、異文化の行動を選択するという意味で「異文化受容と母国での継続」に、異文化より母文化の行動を選択する意味で「異文化非受容や滞在先での母文化維持」や「母国での異文化の抑制」に下線印をした。加えて文化を使い分ける「文化行動の切り替え」、戻ってからの「帰国後の再適応」、日本を否定的に評価する「母文化への批判」に下線で印をした。

3. 1. 1. Eさん

・渡航後 優秀で意欲的な人達に刺激を受け、緩やかな日本の大学に疑問を持った。英語で自分から積極的に話しかけて、他国留学生や日本留学経験者を友人にした。おおらかな距離感や時間感覚に馴染んだ。チャレンジに最適な環境で、現地のやり方を実践するよう心がけた。意見を言い合うのは物事を良い方向に進める方法だと思う。発言に重きを置くようになって、空気とかもう読めない。ホームシックはない。帰国が嫌で現地の学校に転学したかった。

表1 インフォーマント一覧

インフォーマント	渡航地域	年齢	学籍	性別	専攻	留学期間	帰国後経過
E	北米	22	学部	男	理系	10ヶ月	6ヶ月
F	北米	24	大学院	女	理系	10ヶ月	28ヶ月
G	北米	22	学部	女	文系	10ヶ月	17ヶ月
I	北米	22	学部	女	文系	10ヶ月	16ヶ月
J	北米	22	学部	女	文系	7ヶ月	19ヶ月
L	北米	24	大学院	男	理系	10ヶ月	27ヶ月
D	欧州	22	学部	男	文系	12ヶ月	14ヶ月
H	欧州	22	学部	女	文系	10ヶ月	16ヶ月
K	欧州	22	学部	女	文系	7ヶ月	19ヶ月
M	オセアニア	22	学部	女	文系	13ヶ月	16ヶ月
N	アジア	23	学部	女	文系	14ヶ月	14ヶ月
O	アジア	23	学部	女	文系	10ヶ月	10ヶ月

*全員交換留学生。西洋とアジアを分け、地域別に多い順に呈示。記号がDからなのは、別目的の調査が先行した研究シリーズでの、整理の都合による。

・帰国後 日本では皆空気を読みすぎて流されている。意見を言わず、しない言い訳が多く、自分の可能性を狭めている。意見は言うべきで、引っ込み思案で空気を読むのは良くない。留学前の価値観には戻れないし戻りたくないし戻るのは不可能。握手の習慣は継続している。

・特徴 現地文化によく馴染んで日本でも維持、母文化には否定的、再適応に難しさあり。

3. 1. 2. Fさん

・渡航後 友人作りの仕方が日本と違うと気づき、積極的に動いて友人作りに励んだ。人と会う機会を増やし、自分の言葉で伝えた。3ヶ月で聞くこと、3ヶ月で話すことができるようになった。日本に興味のある現地学生や他国留学生と親しみ、社会人とも交流した。ノーと言える文化、ただし言葉を尽くして説明するやり方を良いと思った。参加型の授業には驚いたが、現地の方法を全部吸収しよう、f国人になろうと考えた。日本人はやらないことでもまずやってみると、現地の行動が理解できた。ホームシックなし。帰国は嫌だった。

・帰国後 ずっと留学先に戻りたいと思いつけ、半年から一年は余韻に浸っていた。母国にスムーズに馴染めず、しばらく切り替えがきかなかつた。帰国後は自分が主体になり、周りに必ずしも合わせず、誘いも理由を添えて断るようになった。自分の意見があれば主張していい方が良いし、そうしたいし、すべきだ。ボディランゲージは、外国人みたいと言われるがその方が伝わるかなと思って続けている。ハグは相手にひかれるのでやらない。

・特徴 現地文化に良く馴染み、日本でもその文化行動を継続し、再適応の困難が続いた。

3. 1. 3. Gさん

・渡航後 言葉の問題はあったが、刺激的で新鮮な留学生活だった。日本語を学ぶ現地学生と親しみ、欧州やアジアの留学生と仲良くなった。現地のイエス・ノーの明言を良いと感じ、自分もはっきり言うようになった。自分のやりたいことをやり、自分の考えをよく言うことはいいことだと思う。初対面でも親しみを持って声をかける文化に馴染んだ。ホームシックはなかった。友達が助けてくれるし、授業も毎日楽しく、日本に帰りたくなかった。

・帰国後 滞在先に戻りたいと泣いた。仲良しとの別離、街での気軽な声かけのなさが寂しい。今の生活に慣れねば、大学のこともバイトもせねばと頑張ったが辛かった。日本の授業はやり方が違って静かで物足りず。初対面の人に話しかけたら引かれたし、日本人は真面目すぎる。前は皆と同じに接してきたが、もう周り合わなくても良いと思うようになった。

・特徴 現地文化を取り入れたが帰国後は実践しづらく、母文化を批判。再適応が辛かった。

3. 1. 4. Iさん

・渡航後 生活は想像以上に楽しく、帰りたくなかった。日本に興味を持つ人などと広く付き合

い、留学生のイベントも楽しんだ。ホームシックは皆無だった。授業はやりとりが多く、自分も何か言わねばと、良い意味で姿勢が変わった。マインドが広く、明るく挨拶をする陽気な国だと感じた。しばしば好みを聞かれ、選択を表明しないといけないことを理解し、実践した。カルチャーショックの記憶はない。生活が気に入っただけでなく、日本に戻ってからやらねばならないことが頭をよぎって、帰国したくなかった。

・帰国後 元の生活にスムーズに戻った。留学に名残惜しさはなく、楽しかったなと思うが、もっといたかったとは思わない。今と次に気持ちが向いている。国による違いは気付くようになった。日本にはオープンマインドな人は少ないが、条件が違うし人口密度も高いためかなと考える。授業中に発言者がいないときに自分が言うことはある。交通機関が遅れても、おおらかな受け止め方を思い出し、焦らない方が事故にならないと思ひ直す。日本は可もなく不可もない国だ。自分の視野の広がりを感じて、成長できたと思っている。

・特徴 支障ない範囲で文化行動を継続する。再適応に特に困難はなく、母文化を客観視する。

3. 1. 5. Jさん

・渡航後 初日から不安とホームシックで、店でも戸惑い英語にパニックになった。ルームメイトが合わずストレスだった。最初3ヵ月は帰りたかったが、その後も帰って良いと言われたら迷わず帰った。価値観の合う人を選んで友達になり、現地学生も付き合いやすい人と接した。欧州人は固まるから付き合いわず、アジア系と親しんだ。特に日本人は安心できた。同じ出身大学の人は特に仲良しだった。朝型だからと、パーティーは苦手で通した。現地の人は無計画さやルーズさ、遅刻が多くて苛立ち、日本の方が良いと思っただが、次第に寛大になった。初対面でも話しかけるフレンドリーさ、ハグの文化は好きになった。積極的に意見を言う能動的な授業を良いと感じ、自分も発言しなればと慣れていった。日本に帰りたい気持ちはずっとあったが、滞在先も楽しく、最後は帰りたくない気がした。

・帰国後 帰国後1ヶ月くらいは滞在先を懐かしんだ。ハグしそうになり冷やかされた。だが1ヶ月後には完全に元に戻った。日本の方が居心地は良い。今は電車が遅れても気にならず、授業でも別に発言などしない。時間を守り治安が良いのは、日本の良いところだ。

・特徴 現地文化にある程度馴染んだが、日本が恋しかった。再適応は速やかで、今は快適。

3. 1. 6. Lさん

・渡航後 留学先では多忙で心配に浸る暇はなかった。現地環境に愛着を覚え、芝生での読書や自然が気に入り、良い街だと思った。現地学生の家で季節行事に参加した。気軽に声を掛け合う親しさが良く、現地式挨拶で元気が出た。ジョークは難しいが取り入れる努力をして、その国の人のようになった。日本に興味のある現地学生や他国留学生と親しんだ。夜遅くまで話す友人ができて心

の余裕が生まれ、慣れたと感じた。日本食は恋しかったが、ホームシックは感じなかった。現地を離れるのが寂しく、人との別れが辛かった。

・帰国後 心に穴が空いたみたいで物足りず、現地と似た自然環境の地を訪ねた。授業中は発言がなく、質問に静まり返り嫌だった。意味を取り違えた舶来イベントに抵抗を覚え、話す際に目を合わせないことに違和感を覚えた。結構漢字を忘れていた。くしゃみへの声かけ習慣がつい出る。皮肉な冗談は留学生のみに言い、誤解されるので日本人には言わず。ハグも留学生だけで、日本人には変な意味になるのでしない。相手により態度を使い分ける。

・特徴 現地文化によく馴染み、再適応に困難を覚え、母文化に否定的。行動は使い分けている。

3. 1. 7. Dさん

・渡航後 2ヶ月程で現地の授業サイクルがわかり、友人とコミュニティができて落ち着いた。文化の似たアジア圏の留学生と仲間になったが、欧州人学生はしゃべらないと仲間に入れず、疲れるので馴染めなかった。日本語に興味のある現地学生とは、交流の場に行って親しんだ。3ヵ月後には英語にも生活にも慣れて不自由がなくなった。半年で現地に住むことを普通と感じ、生活も気に入ってすっかり馴染んだと思う。現地の遅刻の多さは、最初閉口したが慣れた。挨拶のボディタッチなど、無理ない範囲で現地の方法を取り入れたが、他は日本人のままだった。会話も相手の話を聞くことから始めた。努めて発話する現地のやり方は疲れるため、結局取り入れずに過ぎた。寒い冬は落ち込んだが、日本とのスカイプで慰めを得た。バイトや就活に追われずゆったり過ごし、ゆとりあるマイペースの暮らしができて快適だった。現地を離れ難く思い、友達との別離も寂しかった。

・帰国後 帰国の嬉しさと忙しさの中、無理なく日本に戻ったと思う。ハグなどは日本では必要ないのでやらない。住みやすく意思疎通がしやすく、優しいのは日本の良さだと、違う生活をしたからこそ再発見できた。

・特徴 現地で似たところのある人と交遊し、母国文化を比較的維持し、再適応は速やか。

3. 1. 8. Hさん

・渡航後 アジア人や英語ができない人には、対応が冷やかで辛かった。当初は授業で討論に参加できず、貢献できずに疎外感を覚えた。緊張のためホームシックにはならなかったが、寮でトラブルがあったときは日本に帰りたと思った。しかしその解決から自信と友達を得て、前向きになれた。他国留学生と友人になり、寮の仲間と境遇や文化的発見を共有した。クラスで発言できて友達ができはじめ、現地学生とも一緒に勉強や休憩をした。ハグは気持ちを伝えられて好きで、取り入れた。男女いずれとも友人になれる、文化施設が身近などの現地文化は好ましかった。帰国前は、帰れる嬉しさと名残惜しさがあった。

・帰国後 滞在先に戻りたくて写真を眺めた。日本では意識的に行動を切り替える。日本人にハグしそうになってやめた。彼とか彼女とかの呼称はつい出てしまう。日本の文化施設の敷居の高さや、座るだけの授業がふがいで泣いた。留学生と寮で暮らすようになり、留学先の文化行動を実践する場ができて落ち着いた。

・特徴 次第に現地の文化行動に馴染み、日本では使い分け。再適応に辛さを覚えた。

3. 1. 9. Kさん

・渡航後 語学が不安で、日本の充実した大学生活の中断も気になった。7ヶ月のホームステイで、最初は気後れしたが、英語上達のためホストと過ごし、2, 3ヶ月後には英語も大丈夫になった。現地の同世代と普通の友達になれたら楽しく、慣れたと感じた。アジアやアフリカの留学生と親しみ、日本人とは付き合わなかった。ホームシックはなし。ハグやキス、家族の愛情表現も、伝えられるのはいいことだと考えが変わって受け入れた。パーティーは初対面でも違和感なく入れて暖かい。聞くのみでなく必ず意見を聞かれ、意見を持って伝えることが大事と分かった。自分も言うが人のことも聞く態度は、尊敬できた。軽い昼食という食習慣は馴染めなかった。帰国前には、部活動の再開と旧友らに会える嬉しさの一方で、現地を離れる寂しさ、深まった友達関係との別れに寂しさがあった。

・帰国後 滞在先が恋しく寂しくて、1, 2ヶ月落ち込んだ。日本の授業は物足りなく退屈で、発言せずに後であれこれ言う参加者の態度に疑問を持った。日本だから切り替えようと思い、ハグやキスは違和感があるので抑えた。だが自分の意見を持って言うことは大事だと分かったので続けており、できるようになって良かったと思う。

・特徴 再適応に寂しさを覚え、母文化に否定的な印象を持つ。行動は意識的に切り替えている。

3. 1. 10. Mさん

・渡航後 他の留学生とホームステイをした。学校の課題が多く家族行動は負担もあった。授業は密度が濃く、予習や発言に努力してついていけるようになった。日本とはスタイルが違うだけで、双方に善し悪しがあり、違いは仕方ない。大学での友人作りは難しかったが広い範囲の人と馴染み、イベントなどで他国留学生や現地に住む日本人と会った。友人づきあいは日本とあまり変わらず、困難は感じなかった。ホームシックはなかったが、英語がわかるまで3ヶ月かかった。現地は日本と違って多文化社会で、大人のプライベートを大事にしていた。大学生の年齢層が幅広く、自分の好きなことをしていいと思えた。人と違っていても構わず、周りと合わせねばならないことはなくて、不都合はなかった。現地の大学に編入も考えたが、この時点では日本の大学の卒業し易さがメリットとみて帰国した。

・帰国後 ラフな服装は楽なので日本でも続け、筆記用具もずっとボールペン。日本人と外国人へ

の態度を、無意識に使い分けしている。外国人にはオープンに接し、伝えたいことをきちんと伝え、目があったらニコツとするし、自分が言いたいことを先に言うが相手のことも聞く。日本人には行間を読み、意図を汲み取る。日本の文化や習慣に気付きが生まれた。日本ではみんな均質で、就活など一斉にせねばならないことがある。異文化を知って常識が増え、視野が広がった。日本を客観視して世界で働きたい。各国に善し悪しがあるから、行きたいところに行って気に入ったところで働いて、落ち着けば良いと思う。

- ・特徴 現地によく馴染み、日本での再適応はスムーズ。文化行動を使い分けしている。

3. 1. 11. Nさん

・渡航後 西洋の留学生が多く、日本的な英語は通じず冷淡な反応で苦勞した。現地の学生は英語が上手で性格も欧米的だ。現地の言語は英語8割だった。次第に友人関係を広げた。アジアに興味のある西洋人は親しみやすく、多様な人と交流した。現地を見て社会の現状を知り、日本の価値観の押しつけはいけないと思った。時間感覚の緩さは慣れないとしんどいと思って次第に受け入れ、代替案を工夫した。人に干渉せず、人目も気にしない点は良いので取り入れた。服も好きなものが着られてストレスがない。寮は賑やかで、裸で歩くなどは開放的すぎて当初不快だったが、次第に寛容になった。日本に帰りたくなくて泣いた。

・帰国後 意見が出ず、討論にならない日本の授業は疑問だ。他人の目を気にしない文化が日本にないので、しんどい国だなと思う。もっと生きやすい日本にしようと、社会活動に参加し始めた。日本の行動様式に戻りたくないが、生活の上では戻っている。心の中では3割しか受け入れなくても、日本式を受け入れなければ住めないから。

- ・特徴 現地文化の受け入れが進み、再適応では不本意ながら母文化に合わせるが批判的。

3. 1. 12. Oさん

・渡航後 外国人用の宿舎と語学授業を利用した。時間のルーズさなど留学生集団内の文化差に驚いたが、自分も日本の行動様式からおおらかな方へ変わった。日本語を学ぶ現地学生と交流し、イベントで社会人と交わり、多様な現地語に触れた。現地食が口に合わず日本食は欲しかった。疲れると家族不在が寂しく、ホームシックを覚えた。居住環境の不便はあったが、言いたいことを言っ
て聞きたいことを聞く自由は気に入り、変な気遣いや気まずさがないことは良いと思った。日本に帰りたくない気持ちが強かった。

・帰国後 数ヶ月経っても滞在先に戻りたかった。頻繁に当該国のドラマを見て言語を聞いた。日本の整然とした生活環境は有り難いが、聞きたいことを聞く前に前置きが必要だったり、不味くても言えなかつたりする日本人の気遣いを、面倒と感じた。食事マナーなどは、不本意ながら日本式へ
へ転換した。おおらかな価値観は続き、日本人は細かくて面倒だと思う。

・特徴 現地の文化が気に入りに、母文化に否定的。再適応に困難を覚えている。

3. 2. 社会文化的な認知と行動の変容と維持

異文化の受容と母文化の維持を整理するため、語りから社会文化的な認知と行動の変容を反映した箇所をカード化した。合計100枚（1人あたり $M=8.3$, $SD=2.31$ ）のカードが得られ、KJ法による分析の結果、大カテゴリとして、文化行動の切り替えが3種類と、異文化への見方が1種類見いだされた。前者は、A. 表出性、B. 社会的圧力、C. 親近性、後者はD. 異文化性と名付けられた。それぞれに含まれる中カテゴリ（a, b〜）の名称と内容を、簡単に説明しながら以下に挙げていく。A. 表出性：a. インタラクティブな授業（発言を求める討論形式）、b. 主張性（自分の意見を表明する）、c. 明言（Yes・Noを明示する）、d. 相互性（互いに言う・聞く）。B. 社会的圧力：a. 自由さ（自分の意思で行動する）、b. 過度の気遣いなし（遠慮しない）、c. 大らかさ（規範を緩やかに捉える）。C. 親近性：a. 身体接触を伴う挨拶（ハグやキスなどをする）、b. フレンドリーさ（気軽に声かけなどをする）、c. パーティー（開放的・社会的に振る舞う）。D. 異文化性：a. 習慣取り入れ（現地方式に置き換える）、b. 受容の態度（文化を受け入れる姿勢を持つ）、c. 母文化拒否感（母文化を否定的に評価する）、d. 転換への消極性（母文化式に戻したくない）、e. スイッチング（相手次第で文化行動を使い分ける）。

つまり彼らは、滞在先で討論方式の授業に慣れたり、気軽な声かけを取り入れたりしていたが、帰国後はその行動の実施をやめたり、相手によりその行動を出すかどうか切り変えたりしていた。こうしたエピソードが出現する様子を、表2に整理した。

3人以上が帰国後に維持していたことは、インタラクティブな授業、主張性、自由さ、身体接触を伴う挨拶で、2人が維持していたことは過度の気遣いなし、大らかさ、フレンドリーさ、個別の習慣の取り入れだった。帰国後の維持がみられないのは、明言、相互性、パーティーなど、相手が必要な行動や、日本では誤解される行動であった。ただ、留学生や外国人相手には、行動が維持される場合がある。なお滞在国によるカテゴリの偏りは明らかではなかった。

3. 2. 逆カルチャーショック

高濱ら（2011）をもとに、滞在先に戻りたい気持ち、寂しさや物足りなさ、母文化の否定感に逆カルチャーショックの反映とみるなら、それはF, N, O, E, L, G, K, Hさんで強かったと考えられる。異文化のスタイルを取り入れてよく馴染んだが、帰国後は獲得した文化行動が実践できずに不満を覚え、母文化を否定的に評価していた。ほか4例では、逆カルチャーショックは比較的目立たない。うちJさんとDさんは、現地でも母文化を維持しがちで、自分に合う範囲で人付き合いを選択しており、文化受容は限定的だった。再適応における困難は少なく、帰国に安堵し母文化を肯定的に評価していた。IさんとMさんは異なる文化を客観視し、その評価を相対化して俯瞰しており、再適応の

前面に出るより、客観視と使い分けに進み、視野の広がりを自認する。維持モデルでは、自分に合う範囲の限定的な友人関係や文化受容に留まり、母文化の維持傾向に自覚がある。カルチャーショックが解消される帰国を喜び、母文化は高く評価され、獲得行動の放棄と母文化への快適な回帰が生じ、再適応は滑らかである。これらから、異文化の受容は逆カルチャーショックを潜在的に準備するが、母文化を拒否的に見ずに相対化して客観視する場合、再適応の困難感が抑制されることが示唆される。

4. 2. 残された課題と展望

今回は環境移行に伴う適応現象の連続性に着眼した。だが弓引きモデルの検証に力点を置いて、得られた事例から該当例と非該当例を見いだして特徴を整理し、機序解明の手がかりを得たに過ぎない。異文化適応は移動方向や滞在先文化を問わない一般的能力なのか、文化特定の能力や不可逆の変化なのかは、異文化滞在者の心理に関する興味深い問いである。文化受容が選択的で固定的なものか否か、いわば文化学習理論を前提にするかどうか解釈を分けると思われる。この心理的な分岐は、文化受容の可逆性や準拠文化の択一性、文化的スイッチングの機能に関わる問いに繋がる。このように解釈が収束しない現象を扱うには、未知の分岐経路を探ったりサブタイプを見出したりするため、質的な手法による探索が役に立つ。今回は限定的な少数例で研究の端緒を開いたが、弓引きモデルの成立条件をさらに精緻化するには、一般性の検証が課題になる。属性や時期、周囲の環境による影響の解明も待たれる。なお今回は明確でなかったが、Black, Gregersen, & Mendenhall (1992) は、再適応に文化間距離の影響を示唆している。今回の学生は行き先に依らず、日本の授業に疑問を持ち、明確な意思表示や個人の自由の尊重を心地よく感じる例が複数認められた。留学で得たものがどこまで文化一般的／文化特定のものは、渡航先の拡大に伴い見えてくると思われる。また帰国後、留学生を相手に獲得行動を実践する例が複数あったことから、国内における国際環境の創出や維持、文化ギャップの緩衝地帯の設定も興味深い問いである。次の発展的、実践的な問いとして、留学の意義や支援に関する多様な教育的な問いが想定できる。豊かな留学交流のため、帰国後への一層の関心が望まれる。

〈引用文献〉

- Akashi, Y. & Tanaka, T. (2005) . “Reentry Adjustment Experienced by Students Reentering to Japan: Relations between Acculturation to Host Culture and reentry Adjustment.” *Asian Association of Social Psychology, 6th Biennial Conference* (in Wellington, New Zealand)
- Babiker, I. E., Cox, J. L., & McC. Miller, P (1980) . “The measurement of cultural distance and its relationship to medical consultations symptomatology and examination

- performance of overseas students at Edinburgh University.” *Social Psychiatry*, 15, 109-116.
- Black, J. S., Gregersen, H. B., & Mendenhall, M. E. (1992). *Global assignments*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Brabant, S., Palmer, C. E., & Gramling, R. (1990). “Returning home: An empirical investigation of cross-cultural re-entry.” *International Journal of Intercultural Relations*, 14 (4), 387-404.
- Cox, B. J. (2004). “The role of communication, technology, and cultural identity in repatriation adjustment.” *International Journal of Intercultural Relations*, 28 (3-4), 201-219.
- Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E. (1963). “An extension of the U-curve hypothesis.” *Journal of Social Issues*, 19 (3), 33-47.
- 川喜田二郎 (1967). 『発想法—創造性開発のために』 中公新書
- 近藤裕 (1993). 『カルチャー・ショックの心理—異文化と付き合うために—』 創元社.
- O’Sullivan, S. (2002). “The protean approach to managing repatriation transitions.” *International Journal of Manpower*, 23 (7), 597-616.
- Presbitero, A. (2016). “Culture shock and reverse culture shock: The moderating role of cultural intelligence in international students’ adaptation.” *International Journal of Intercultural Relations*, 53, 28-38.
- Szkudlarek, B. (2010). “Reentry-A review of the literature.” *International Journal of Intercultural Relations*, 34, 1-21.
- 高濱愛・田中共子 (2011). 「短期交換留学生のリエントリーステージにおける課題の分析：逆カルチャーショックと留学活用を中心に」 『人文・自然研究』 5, 140-157.